
温もり ルーフェイア・シリーズ05

こっこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

温もり ルーフエアー・シリーズ05

【Nコード】

N3221E

【作者名】

こっこ

【あらすじ】

手が届かない、そう思っていた世界が、いまここにある。ようやく馴染んで「ふつうの」学院生活が出来るようになったルーフエアーの、ある冬の日です。このシリーズには珍しい、ほのぼのストーリーです。今までに比べると短いです。反王道、「無情」という名の条理がある」とまで言われた、ひたすらビターなシリーズです。元7桁Hitサイト掲載の改訂、シリーズの第5作です。

携帯版は1行毎の改行です

Episode : 01 遠出

R u f e i r

「シーモア！」

かけた声に、彼女が顔を上げる。

「遅いよ……って、なんだよそのカッコ」

「？」

あたしは首をかしげた。

別にいつもと同じで、どこか変わっていないはずだけど……。
だけどシーモアの目には、そう映らなかったみたいだ。

「もうちょつとなんか、可愛げのある格好してくると思ってたのにさ。それじゃまるで、男子じゃないか」

「あたし一度も、男子に間違えられたこと、ないけど……？」

「そーゆー話じゃないって」

シーモアが呆れた顔をした。

「少し期待してたんだけどな。損した」

損したって……なんだろう？

「まったく、シエラN o . 1の呼び声も高い美少女が、なんだってそんなカッコ……」

「いつも、こうだけど……？」

ショートパンツにジャケットにロングブーツ。あと最近はずがに寒くなってきたから、中に薄手のハイネックのセーター。

ほんとだったら冬の戦闘用を着てたいところ 軽いし、動きやすいし、あったかいし だけど、そうもいなくて、たいていこなふうだ。

でも他にも、似たような格好をしてる女子は多い。

「もういい、分かった。あんたに期待したあたしが、バカだったよ」
「？」

やっぱりよくわからない。

けどシーモアのほうはなんだか、自己解決したようだ。

「さ、行こうか？」

「うん」

行くというのは、ケンディクの街のことだ。ナティエスたちに誘われて、これからひとまわりすることになってる。

ただちよつと時間の都合がつかなくて、あたしとシーモアはあとから二人で行って、合流することになった。

「ほら早く、船が出ちまうよ？」

「あー！」

慌てて、出る寸前の連絡船に飛び乗る。すぐに綱が解かれて、船がすべるように動き出した。

学院のある島は冬だというのに緑色で、その向こうに広がる海との対比が、とてもきれいだ。温暖なことで知られる、ケンディクならではの光景なんだろう。

そういえば前にこの連絡船に乗ったのは、真夏だった。シエラへ入学する時に乗って以来、まだ二度目だ。
そして気がついた。

もう半年も、過ぎたんだ。

なんだかとても、不思議な気がする。

Episode : 02

たったそれだけしか経っていないのに、あたしの生活は激変した。戦場にいたことが夢だったようにも思える。

身内と離れたのも初めてだ。もっとも他のシユマー家の子供は、たいてい生まれた直後から親と別に暮らしてるから、あたしはかなり甘いのだけど。

ただ確かに生活は平穩になったけど、その分カンが鈍ってしまいそうで、けっきょく毎日訓練施設に入り浸って、太刀を振りまわしてる。しかも校舎裏の訓練施設を禁止　これ以上魔獣を退治するな、だそうだ　されて、訓練島まで出るハメになっていた。

まあこの方が、思いつきりやれていいんだけど……。

どっちにしても上級生になって、また戦場へ出るまであと最低四年、よほど気合を入れておかないとボケてしまいそうだ。

「なに見てんのさ」

「え？」

シーモアに訊かれて、はっと我に返る。考え事に熱中してて、かなりぼうつとしてたみたいだ。

戦場だったら死んでるな。

自分に呆れてしまう。たった半年でこの調子だから、先が思いやられた。

「なんか面白いもんでも、あつたかのい？」

「何見てたか、よくわかんない……」

「聞くんじゃないかった」

シーモアが処置ナシ、って顔で肩をすくめる。

「まったくあんた、変わってて面白いよ」

「どういう……意味？」

「そのまんまさ」

そのままってつまり、あたしが普通と違うから面白いっていうことなんだろうけど……。でもあたしってそんなに、変わってるんだろうか？

たしかに戦場育ちの分、そのへんは極端だろうけど。

そんなことを思っているうちに窓の外は、本土がだんだん大きくなってきた。砂浜が見えてきた。

「ここ、きれい……」

「ああ。夏なんかこの海、泳ぐのにサイコウだよ」

「こんなところで？」

世間って、案外ヒマなのかもしれない。

でもそういえば、あたしは終わってから中途入学したからやってないのだけど、年間のカリキュラムの中に水泳が入っていた。

思ってた以上に、シエラはのんびりしてるらしい。

MeSがこんなふうで、いいんだろうか？

まさかシエラへ来る前は、MeSがこんなおんきなところだなんて、思わなかった。命のやりとりをしないで済むぶん戦場よりマシ、なくらいだと想像してたから。

でも、来てよかったと思う。

こんなふうな友だちと街へ出るなんて、一生縁がないと思ってた。だいいち友だちが来るとさえ、あたしは思ってた。なかった。

きつと死ぬまで、あの戦場でだけ過ごすとはかり……。

急に涙があふれてくる。

「ほら、ルーフェイア着くよ……ってゴメン、あたしなんか言っちゃったかな？」

「うっん、違う、違うの。」

あたしこんなふうに、友達と出歩けるようになるなんて、思っ
てなかった……」

涙を拭きながら、慌てて説明する。

聞いたシーモアが、ちよつと複雑な表情をした。

「ばーか。行くよ」

それだけ言つて歩き出した彼女の背を、あたしは慌てて追いか
けた。

ご質問への回答

システムの都合上、直接返信できませんでしたので、こちらで。

ルーフェイアの太刀について、第1作ではタシユア先輩からもら
った、第2〜4作では兄の形見となっている、との指摘メッセー
ジを頂きました。

はい、そのとおりです。というのは第1作で出てきた太刀と、第
2〜第4作で出てきている太刀は、別物のためです。

この件については少し先の話で、なぜ変わったのか出てきます
ので、申しわけありませんがお待ちください。

ご質問、ありがとうございました。

Episode : 03

Seamor Side

ケンデイクまでの連絡船の中、隣の美少女をシーモアは、なんとなく眺めていた。

不思議、としか言いようのない少女だ。

こうしていると華奢で儂げで、とても独りで生きていけるようには見えない。だがひとたびバトルとなれば、並ぶもののない戦女神と化するのだ。

（ほんと、アンバランスってやつだね）

まさにその一言に尽きた。

しかも性格にいたっては繊細としかいいようがなく、すぐ泣き出してしまふ。

ただこれは周りの話では、シエラへ来る前が何かいろいろたいへんだったとかで、その反動もあるらしいが。

（けど、このカワイさで泣くってのは、やっぱり反則だなあ）

たとえ彼女に非があったとしても、こちらが悪者にされてしまいたいそうさ。

船が揺れる。

もうそろそろ、ケンデイクの街に着く頃だった。

「ルーフェイア、着くよ」

言って、気がつく。

少女は泣いていた。

（まさか、さっき言ったことで？）

思わず心配になる。ふつうならどうという言葉ではなくても、こ

の少女は傷ついてしまうことがあるのだ。
もう少し、自信を持っていいと思うのだが……。

「ゴメン、あたしなんか言っちゃったかな？」

「ううん、違う、違うの。」

あたしこんなふうに、友達と出歩けるようになるなんて、思っ
てなかった……」

シーモアの問いに、ルーフェイアはそう答える。

聞きようによっては、以前イジメたことを責めているような言
い方だ。だがこの少女には、そういったイヤミなところはない。

本気で嬉しくて泣いている、と思って間違いないだろう。

(……言ってくれるねえ)

とても同じ年とは思えないほど華奢な少女にこう言われると、と
ても意地悪など出来なくなってしまう。

何より、あれだけの騒ぎをすべて水に流してくれているのだ。こ
れ以上こっちから何かするのは、シーモアにしてみればプライドが
許さない。

「ばーか。行くよ」

照れ隠しにわざとそう言うと、シーモアは荷物を肩にかけた。

「あ、ごめん」

涙を拭いて、ルーフェイアもついて来た。

Episode : 04

R u f e i r

潮風が優しく吹きぬけた。

後ろに控える海のせいなんだろうか？ ケンディクの街は、なんとなく青のイメージがある。それに街全体も、観光都市のせいか手入れが行き届いていて、とてもきれいだ。

「どこで……待ちあわせ？」

「駅前の広場だよ」

あたしの問いに、シーモアはそう答えた。

白い石畳の道を歩いていく。

メインストリートをずっと行って、大きな交差点で右に折れる。もうそのすぐ先が、駅前の広場だ。

あたしたちは広場をざっと見まわして、すぐナティエスとミルを見つけた。しかもなぜか、イマドとその友だちまでいる。

「悪い、待たせたね」

「ううん、時間ぴったりだよ」

「待ってないよん」

シーモアの言葉に、ナティエスとミルがはしゃぐ。

それからこの2人、今度はのあたしの方に向き直って、また騒ぎ出した。

「あー、ダメじゃん。ルーフェってば、やっぱりそんなカッコしてる〜！」

「ほおんと、なんでそんな、男の子みたいにしてんの?!」

なんか、シーモアとおんなじことを言う。

「あたしも言っただよ。でもルーフェア、ちつとも分かってなくてさ」

「もお！ とことん常識ないんだから」
「なんだか、ひどい言われようだ。」

「そしたらさ、先にうちに行こうよ どうせ行くんだから」
「ミルが勝手に決める。」

「そうだね。そうしようか？」

「イマド、こっちにしちゃっていい？」
「ああ」

ナティエスの言葉に、イマドたちも笑いながら立ち上がる。どうも状況を飲み込んでいないの、あたしだけみたいだ。

でもなんか、ヤな予感がするんだけど。

「んじゃ決まり！ さ、こっちこっち」

ミルが強引に、あたしの手を引いて歩き出した。

「何……？」

「いいからいいから」

わけも分らないまま、引きずられていく。

「こっこだよ」

彼女が得意げに立ち止まったのは、一軒のブティックの前だった。そして勢いよくドアを開けて、店に入っていく。

「お父さーん、ごめえん！ ちょっと予定変わってね、早くなっちゃったんだ」

はじけるような声で、店の奥に声をかけた。

Episode : 05

「父さん？」

「あ、ルーフェイアは知らないか。ここさ、ミルんちなんだよ」

「うそ……」

実家がブティックやってて、娘がMeSって……？

息子ならまだ分かる。徴兵逃れで、男の子をMeSに入れる親は少ない。

けどミルはもちろん女子だし、実家はブティック経営なんて、どこを見回してもMeSへくる理由が見当たらなかった。

「あはは、やっぱルーフェイアもびつくりしてる」

あたしの様子に、ナティエスが笑い出す。

「だって、なんか……ぜんぜん関係ない……？」

「ミル、お母さんが軍にいたんだ」

そんな理由でいいんだろうか？

事実は小説より　　とは言うけど、ここまでくると予想をはるかに超えてる。

「ま、ご多分に漏れず、それなりの事情はあるんだけどさ」

「……そう、なんだ」

そう言われて少し納得する。

もっとも抱えている事情って点じゃ、あたしが学院内で一、二を争ってしまうだろうけど。

と、勢いよくミルが戻ってきた。

「用意できてるって」

「そりゃよかった。じゃ、行こうか？」

なぜかシーモアが、がっちりあたしの右手をつかむ。

「そだね」

ナティエスが左手。

「な、なに……?!」

けど、みんな笑っただけだ。

「はーい、いつてらっしやあい!!」

そのあたしの背中を、勢いよくミルが押した。

ぜんぜん予想してなくて、思わずよろける。そこをすかさず、シーモアとナティエスに引きずられた。

「ちょ、ちよつと!」

「だめ! ちゃんとこつち来て!」

なんか勢いにおされて抵抗できなくて、そのまま隣室まで連れて行かれる。

「え、あ、やだ! ちよつと、何……?! やだ、やめて!!」

「だゝめ」

「やだ、やだつてば!」

「静かにしなさいって」

まさか、友だち相手に本気を出すわけにもいなくて、されるがまだ。

「どうだい、出来たかな? おや、いいじゃないか」

結局ミルのお父さんが覗きに来たときには、しっかり着替えさせられていた。

Episode : 06

「ねえ、こんな格好、やだ……」

「どして？ カワイイよ」

「だって……」

ひたすら動きづらい。

だいいちスカートの類なんて、何かあったときの正装以外、着たことがない。

「ほら、いいからこつち来なよ」

またもや引きずって行かれる。

次に連れて行かれたのは、ミルの家の食堂だった。なんだかいり、テーブルの上に並べられている。

でもこれ、どうみても何かのお祝い……？

「ねえ、これ……何？」

あたしが聞くと、みんなが爆笑した。

「やだもつ。忘れちゃってるの？」

「でもさあ、らしくていいんじゃないか？」

まったくわけが分からない。

「ねえ……だから何なの？」

「しょうがないなあ。イマド、説明したげなよ？」

水を向けられて、初めてイマドが口を開く。

「お前、今日誕生日だろ」

「え……あ！」

忘れてた。

でも、あたしだって忘れてたのに、どうしてみんな知ってるんだろっ？

「お前のお袋だよ、俺らに教えたのは」

よほどあたしが不思議そうにしていたらしくて、イマドが説明する。

母さんてば！

あたしの母さんはかなり変わってる上に、ともかくなにかと、過剰なくらいに世話を焼きたがる人だ。

けど……今回は許せるかな？

また涙が出てくる。

「あゝあ、やっぱりルーフエア、泣いちゃった」

「ほらほら、泣くことないでしょ。さ、座って座って」

自分でも泣いてちゃダメだとは思っただけど、どうしても涙が止まらない。

「さ、泣いてないで食べよう？」

「うん」

あたしやっと涙を拭いて、席についた。

Episode:07

Natties

シーモアがイマドから相談された時から、みんなでこつそり計画してたんだけど、思ったとおりルーフェアったら喜んだの。

ついでに泣いちゃったけど。

あと場所を提供してくれたミルのお父さん、すつごくルーフェアのこと気に入っちゃって そりゃ彼女超カワイイもんね なんだかいりいろ、おまけでプレゼントしてたみたい。

で、普通だったらミルが焼きもち妬くとこなんだけど、これがまた彼女そーゆーものをどっかに忘れてきちゃった性格だから、いっしょになつて騒いでるし。

ともかくみんなでおいしい料理食べてお祝いして、あたしたち外へ出てきて。

「ねえ、これからどうする？ もつかいどつか行こうか？」

あたしが聞くと、みんなが考え込んだ。

「そうだね、とりあえず公園でも行ってみるかい？ 今日は風もないし、きつといいんじゃないかな？」

港も見えてきれいだしさ」

シーモアが提案する。

「公園？ そんなのがあるの？」

「ルーフェア、公園ってべつに珍しくないから」

何かにつけて、このズレっぷりだもの。でも少年兵あがりだつていうし、ケンディクなんかもほとんどここへ来たことないっていうから、しょうがないかな？

他にこれとっていい案もなかったから、みんなでそこへ行こう

ってことになった。

「きれい……」

坂のとちゅうで、ルーフエイアったら感動して立ち止まって。ここ、公園への坂を下りてくと、いきなり海が開ける。ケンディクでもいちばんきれいな場所じゃないかな。

穏やかな潮風に吹かれながら、みんなでぞろぞろ。

でもこうしてみるとルーフエイア、ほんとにカワイイ。

ミルのお父さんが選んでくれた 写真渡して頼んどいたの
白のブラウスに、淡い翠色のボレロとスカートのツーピース、すっごく似合ってるし。

こーゆー可愛いのが似合うって、美少女の特権かな？

港は今日も何隻もの船が入港してて、人が行き交ってた。

「あ、ほらほらあ。またくるよあ？」

ミルったらもう、五歳児みたいな声。

けどつられてそっちをみると、確かに一隻が入港するところ。しかも大きさはそんなじゃないけど、すっごい豪華な船なの。

「ああいうの、一度乗ってみたいかも。ね、ルーフエイア？」

「……乗っても、たいしたことないの」

「え？ 乗ったことあるの？」

彼女の分かりきったような答えに、あたし思わず聞き返しちやっ
た。

でもルーフエイア、答えてくれない。しかもなんだか厳しい顔。
なんて言うのかな？ どうしてこれがここに、っていう感じの表情だった。

Episode : 08

R u f e i r

どうしてこの船が、ここに？

それがあたしが、いちばん最初に思ったことだった。

一見豪華なだけの、普通の船。でも、あたしには分かる。これは間違いなく、シュマー家のやつだ。

こんな連絡、まったく受けてなかった。だいいちこんなに目立つマネをして、いったいなんのつもりなんだろう？

そのうち船から、人が降りてきた。うち、何人かは見覚えがある。出来れば気づかないことを祈っていたけれど、ムリだったみたいだ。そのうちの一人がしっかりとあたしの姿を認めて、こちらへ歩いてくる。

あたしよりずっと年上の青年。髪も瞳も同じ色。

「ねえあれ、兄弟？」

「うっん……」

じっさいは、従兄弟だ。けどここで、そう言うわけにもいかない。でもそれを知ってか知らずか、彼はまっすぐこちらへ来ると口を開く。

「グレイス、ちょうどよかった。頼まれていた物を持ってきたところだ」

「その呼び方はやめて。それに届け物なら、学院宛に送ればすむでしょう？　なんでわざわざ、こんなことをするの？」

つい声がとげとげしくなってしまうのは、自分でもどうしようもなかった。

けど彼、あたしのいうことなんか聞いていない。

「ケンディクに二家族駐在させることになったんだ。なにかあれば、そこへ連絡を取ってくれればいい。学院の通信網は、まったく信用出来ないからな。」

それと届け物一式は、これからちゃんと学院へ持っていくさ。君に持たせたりはしないよ」

友達が一緒にいることなんて、まったく気にしない。あたしが必死に事情を隠してるのに、それをわざと表に出そうとしてるみたいだ。

案の定、最初からある程度事情を知っているイマドはともかく、シーモアもナティエスもミルも訝しげな顔をしている。しかもまだ、話は終わらなかった。

「それから、一度ファクトリーへ帰ってくれないか？ 夏の精密検査をしていないだろう？」

「長期休暇でもなかったら、帰れるわけないでしょう？ それにこんな話、ここでしないで」

どこまでぶちまける気なんだろう。

「別に構わないだろう。どうせ誰に分かるわけじゃない。」

すぐに帰れないなら、とりあえず採血だけさせてもらえないか？」

拳句に言いながら、専用入れ物を取り出している。

彼は学者だ。主に医学系を修めていて、あたしや母さんといったシユマーの中でも血が濃い総領家の、主治医も勤めている。

だから一応、あたしの身体を心配してはいるんだろうけど……。

Episode : 09

「いいかげんにして。採血だったら後でして、凍らせて送るから。それにあたし、採血しにここへ来たわけじゃないの」

早々に会話を打ち切って引き上げようとする。けど。

「よく見るとなんだ、その格好は？　ずいぶんな安物を着ているな」

「ファールゾンっ！」

さすがのあたしも、思わず怒鳴りつけた。

彼に悪気がないのは分かっている。研究ばかりで世間の常識をまったく知らないだけだ。

でも、言っていないことと悪いことがある。

ただ当のファールゾンは、なにを怒鳴られたかさえ分かっている。いい。

「だってそうだろう？　グレイスともあろうものが、そんなそのあたりで売っていきそうなものなど。

こっちへ戻ればひとつも不自由はしなくてすむのに、君の考えていることがわからないよ」

「……ファールゾンⅡゼニア？」

あたしの声が、刃を含む。

「ん？　なんだ、怖い顔をして？」

次の瞬間、あたしは動いていた。強烈な左の回し蹴りを食らって、あたしより大柄な彼が吹っ飛ぶ。

イマドが口笛を吹いた。

それを後ろに聞きながら、お腹をかかえて転がったままの彼に、
あたしは歩み寄る。

「早く帰ってもらえる？」

これ以上、みんなに嫌な思いをさせたくない。

「帰ってくれないなら、あたしも考える」

「うぐ……いやだから、君にはそれは、ふさわしくないと……」

あたしはもう一歩進み出た。

「何も分かってないのに、何が言いたいのか？」

それよりこれ以上みんなに嫌な思いさせるなら、容赦できないわ。
今ここであたしは何をしても どこからも文句は出ないのよ？」

この恫喝に、ファールゾンの顔から血の気が引いた。

実際、いまあたしが口にしたことを実行しても、本当に文句は出ない。そのことは彼も知っている。

「分かったなら、少しは慎んで。」

だれか、ファールゾンを連れていつてくれる？」

少し離れたところで成り行きを見ていた家の者に声をかけると、
彼らは慌てて走り寄ってきて彼を連れていった。

それを見届けて、みんなの方へ振り返る。

「あの、ごめんね。うちのが、なんかヘンなこと……」

許してもらえないとは思えないけど、ともかく謝った。

Episode:10

「ルーちゃん気にしちゃダメだよ。ルーちゃんが言ったわけじゃないから」

「てか、ルーフェアってさ、怒るところまでキャラ変わるのか」

「んー、こいつの場合どっちかってと、内弁慶じゃねえかな」

「なんだソレ」

「ともかく悪いのアイツだし！でもさ、ルーフェって結構やるねえ」

みんなが口々に言う。

ただひとりナティエスは、見るべきところを見てた。

「ねえ……ルーフェアの家ついていったい、どういうのなの？」
いちばん尋かれたくないことを尋いてくる。

どう答えようか困っていると、意外にもシーモアが助け船を出してくれた。

「やめな、ナティエス。学院にいる連中なんて、みんなワケありさ。あんただってそうだろう？」

だから、聞くんじゃないよ」

「そうだね、わかった」

ナティエスも、あっさりと引き下がる。こんなにありがたいことはなかった。

「シーモア、ナティエス……」

「気にしなさんなっ」

これでいい、そんな笑顔でシーモアが笑った。
また泣きそうになる。

「ああ、ルーフェイア、ほら泣いちゃダメだってば」

「おまえ、何回泣くんだよ……。じゃあねえ、もっかいどつか食いに行くか？」

「あ、賛成！」

「あたしも」

「ぼくはルーちゃんが行くところになら、そりやどこへでも
イマドの言葉に、みんなが賛成する。」

「ちょうどおやつ時間だしね。どこにする？」

「そしたら……。あたし、払うから」

「え、ホント？！」

さっきのことがあるからそう言うと、みんなの顔がぱつと輝いた。

「よし、んじゃ高いの食べるぞー！」

「だよね。あの船とか今のこととか、ルーフェイアってばぜったい、
お金持ちなのはキマリだもんね」

「あ……」

しまった、と思う。

そしてまた、何か嫌な予感。

「えっと、あの、あたしも、そんなに持ち合わせ……」

「だーめ！ ああいう家なら、どうせ信用決済の記録石持ってんで
しょ」

「それにあの調子なら、イザとなれば、誰か来てくれそうだしね」
「言うんじゃなかったと少し後悔しながら、あたしはみんなといっ
しよに、繁華街へと足を向けた。」

Episode : 11 神話

I m a d

「やっぱ昼間とは、雰囲気違うな」

「うん」

茜に染まった夕暮れン中、俺とルーフェイア、また港へ降りてきたところだ。ちなみにシーモア他の連中は、気を利かせてちゃっちゃと学院へ戻ってる。

けどなあ。

気を利かせたのが悪いってこたねえけど、ルーフェイアの場合はんなものどつかへ落としちまってるわけで。

「すごい、海が金色！」

なんせこの調子だ。

もっとも年より見かけが幼いから、これもけっこう似合っちゃいる。しかもいつもと違って可愛いカッコしてるから、言うことナシだった。

「こんな色……初めて」

たしかにこいつの言うとおり、今日の海はきれいだった。夕焼けに染まった海が、陽の光に煌めいて、文字通り金粉でも撒いたみたいだ。

「撮影機でも、持ってきてりゃよかったな」

「ううん、いい」

写すと色が消えるっていうのが、こいつの言い分だった。

「それに戦場じゃ、そんなの写すヒマ、なかったし……」

「そうだよな」

こいつの心から、やるせないほどの悲しさが伝わってくる。
優しくて泣き虫で　　なのにこいつが育ったのは、地獄とも言える戦場だ。

その辺のことは、俺はこいつのお袋からある程度聞かされてた。しかもついでに、保護者を頼み込まれてる。

ただ……昼間の騒ぎを見る限り、実際はもうちつと複雑らしくな
た。少なくともでかいバツクを持つてるのは、間違いない。

少しだけ迷って、俺は口を開いた。

「昼間のナティエスじゃねえけど……お前って、ホントはなんなんだ？」

ルーフェイアのやつがうつむく。

「別に言いたくなきゃ、かまわねえんだけどよ」

「シュマーなの」

「はい？」

思わず妙な返事を返す。

「つーか、今とんでもないこと聞いた気が……」。

「まさかとは思うけどよ、シュマーってあのシュマーか？」

「イマドがどのシュマーを言ってるのか、わかんないけど……。でも多分、そうだと思う」

「マジかよ」

ほかに言いようがなかった。

シュマーってのは、軍事関係者の間じゃ裏で有名ってやつだ。っても実態はなんだかほとんど分かってなくて、代々傭兵をしてて、ガキを戦場で少年兵として育てちまうって話だけが知られてた。けどまさか、この華奢なこいつが、その「シュマー」って……。しかも昼間の様子じゃ、同じシュマーでもルーフェイアのヤツ、

そうとう上のほうの身分（？）だろう。

ただどっか、俺は納得もしてた。

「どうりでお前、上級傭兵並みなワケだよな。つかシュマーなら、そうじゃないとダメなんだろうし」

こいつのバトルはたまに目にすっけど、はつきり言って上級の先輩たちをヘタすりゃ上回る。

だけど俺の一言に、こいつときたら、メチャクチャ悲しげな表情になった。

「それ……違うの」

「違う？」

泣き虫のこいつが泣かないのが、コトの重さを表してた。

Episode : 12

R u f e i r

話して……いいんだろうか？

あたしは悩んでいた。

自分がシューマー家だと言うのは、どのみちイマドには話さなければならぬと思っていた。

だからそれは、別にいい。

だいいち今でも、イマドはあたしの特異体質に併せた薬を持ってくれていて、何かあったときは対応してくれることになっている。でも……その先は別だ。

聞けば、いやでもあたしにまつわる一連の流れに、巻き込まれるだろう。

そんなことに、イマドを巻き込んでしまっていていいんだろうか？

グレイスは死神。

そう、昔ファールゾンが言っていたのを思い出す。でもそんなあたしに、イマドが意外な言葉をかけた。

「『グレイス』は、ンなに珍しいのか？」

「知ってる……の？」

「お前の普段のラストネームが、ホントはミドルネームだってことはな」

どうやら母さんから聞いたらしい。

またお節介して！

ほんとうに母さんと来たら、油断も隙もない。

あたしの本名は、ふだん学院などで使っているのとは、少し違う。グレイスは実際には、ラストネームではなくミドルネームだ。ルーフェイア「グレイス」シユマー。それが本当の名前だった。

シユマー家と言うのは、軍関係者の間ではわりあい有名だ。かなり長い間続いている傭兵の家系で、子弟を戦場で育てることで知られている。

ただ家の人間は実際にはシユマー姓を名乗らないから、ちまたじや噂だけで誰も実態は知らない、という状況になっていた。それにしてもいったいどこまで聞いているのか、不安になる。

「けどそしたら……何を、知ってるの？」

「だから、お前の名前だけだって。」

けどグレイスってのがメチャクチャエライのは、さっき分かった」「そっか……」

こんなに察しがいいなんて。

けど、次に思い出す。イマドに隠し事は、できたためしがない。

「で、グレイスってなんなんだよ？」

気軽な調子で彼が訊いてきた。

どう説明するか迷う。

だいたい、ちよつと説明して分かるようなものでもないし……。

違う。

それ以前にあたし、どうしてこんなにすらすら話してるんだろう？ イマドは……関係ないのに。

知ってほしいのと、言うてはいけないのとの間で、あたしは黙ってしまった。

「ま、さっきも言ったけど、言いたくなきゃそれでいいしな。けどよ……他に誰も知らないっての、けっこうつらいぜ」はっと顔を上げる。

イマドと視線が合った。

寂しいのか哀しいのか分からない、イマドの不思議な表情に、なぜか涙がこぼれた。

Episode : 13

「いい、の……？」

「いいって」

その瞬間　あたしの中で何かが、ふっと軽くなる。

ずっと辛かった。

父さんや母さんと一緒だったところと違って、誰もあたしの本当の姿を知らなくて、でもそれを知られないように隠して……。

こぼれる涙が止まらない。

「あたし……シユマー家の、次期総領なの……」

「なるほど」

なんだかあっさりといマドが納得した。

「これだけで、分かるの……？」

「いや、わかんねえけど。でもよ、よーするにそゆ立場なんだろう？」

いい加減とさえいい加減だけど、イマドなりに理解はしているらしい。

あたしはひとつ息を吸って、話し出した。

「うちの家、ふつうは『次期総領』はいないの。」

けどあたしは……グレイスの名前を持つてるから、特別で……」

うちの家でこれを名乗るのは、あたし一人だ。逆に言えばそれだけ、この「グレイス」という名前には重さがあるということになる。もともとの由来は、家の始祖メイア「グレイス」から来ていた。遠い昔、まだ人が神と争っていたころ　彼女は神を封じたのだという。

「あれ、それって言い伝えと違わねえか？」

「うん、少し違う」

一般に伝えられている伝説では、神は封じられたんじゃないくて、「逃げた」ってことになってる。

「魔法の力を手に入れた人間は、軍を組織して天へ攻め込んで……」

「けど、居なかったんだよな」

「うん」

世界を創りなおすという神に、人は逆らった。門をくぐり天へ攻め込み、それを見た神は、地上を予定より早く焼き払った。

同時に神は天界に怪物を大量に放ち、人間を襲わせた。一瞬にして人々はパニックに陥り、散り散りになって地上へと逃げ戻ったという。

それでも戦い慣れたごく少数は、天の城へ攻め入り玉座までたどり着いたが、そこに神の姿はなかった。

「だから、逃げたんじゃないか、って話だろ」

イマドの言うとおりだ。

そのあと、人は天界から魔獣に追われて逃げ戻り、焼かれてさらに貧しくなった大地のせいで、互いに争うようになった。

そして消えた神は、いまもどこかに潜んでいるのかもしれない。そう伝説は締めくくっている。

「ただ、うちじゃ、そこが違うの」

「えーっとつまり、シュマーじゃそのメイアとやらが、封じたってなってるワケか？」

考えながら言う彼に、うなずく。

そして、続けた。

Episode : 14

「そのとき、始祖メイアは亡くなって……その子供たちが、シユマ―家を作ったの。」

「いつか帰りし神を、倒すために」

「なんか、やたら壮大な話だな。」

「けど、ずっと昔のことだろ？ どうだっていいんじゃないのか？」
イマドの言葉に首を振る。

「ううん、違うの。昔のことじゃ、ないの……」

シユマ―家にとってこの話は、「昔のこと」「じゃない。」

「“神”は封じられただけ。だから今も……復活のチャンスを狙ってる。」

そしてシユマ―家には、稀に産まれるの。始祖メイアと同じううん、それ以上の力を持った、子供が」

「それがお前ってワケか」

何も言えなくなってしまったあたしを見て、イマドがひとつ、ため息をつく。

「じゃあ……学院なんか連れてきちゃって、悪かったな。昼間のヤツも言っただけとお前、自分ちだったら大事にされそうだし。」

「帰ったほうが、いいんじゃないのか？」

「それはイヤ」

自分でも驚くくらい間髪いれずに、答えてしまった。

「なんでだ？」

不思議そうな顔で、イマドが聞く。

「だって、特別扱い……されるから」

いきなり彼がお腹を抱えて笑い出した。

「　　はは、あはは、ははっ、お、お前らしいや」

「そんなに……笑わなくなった……」
　　なんだか妙に悔しい。

「いや、悪い悪い。でもよ、普通は特別扱いされたくて、みんないろいろやるんだぜ？」

それをお前ときたら、あっさりヤダって言い切るから」
イマドはまだ笑い転げてる。

「みんなはそうでも、あたしはいや……」

つい、いろいろなことを思い出して悲しくなる。

あたしは……普通がよかった。

普通の女の子みたいにとまでは言わない。でもせめて、他のシュマーの子供たちと同じくらいでいたかった。

けどそれは、到底ムリな話で……。

三歳の時に「グレイス」の名を継ぐ　始祖とあたしを含めても七人しかいない　と分かってから、ずっとあたしは特別扱いだった。

次期総領の座を得、絶大な権力を得て……もしあたしが死ねと言えば、うちの人間はためらわずに自殺するだろう。

総勢で数百人にのぼるシュマー家。

そしてそこから分かれて、後方支援的なことや様々な研究をするようになった、ロシュマー家の数万人。

それだけの人間の命運が、あたしみたいな小娘の手に握られてしまっている。

こんな、右も左も分からないような小娘に。

Episode : 15

「あと四年で……あたし、総領になるの。でも、あたしには……ムリ……」

こんなことを人に言ったのは、初めてだった。今まで周囲にはシユマーの人間しかいなくて、とても言えなかった。

あたしにとってシユマーの人間たちの、あの敬愛のまなざしは重荷だった。

彼らはあたしを疑わない。そういうふうに出ていない。グレイスと総領には絶対服従、それがシユマーだ。だから、間違うなんて許されない。

「そんなの、あたしに、出来るわけ……」

うつむいてため息をつくあたしに、イマドが言葉をかけた。

「ん、お前ならできるんじゃないかな」

「どうして？」

「すぐ泣くから」

「え？」

これは 初めて言われた。当然意味などわからない。

あたしの驚いた様子に、イマドは「上手くいえない」と言いながら、言葉を続けた。

「なんつーのかなあ……お前マジ泣き虫だろ？ ぜんぜんリーダーっぽくないって言うか」

気のせいかな、ひどいことを言われてるような……。

「でもよ、だからいいと思うんだ。リーダー然としてるヤツって確かに頼り甲斐あるけど、どっか雲の上って感じじゃん。」

だけとお前だと、誰かになんかあっただけで泣いちゃってさ。そりゃそーゆーの、リーダー向きじゃないかもしれないけど、ついてく側にはありがたいぜ？」

「そう、なの……？」

あたしはいつも周囲から、泣くのを止めるとばかり言われていた。

「全員が全員そうとは言わねえけどさ。」

でもお前みたいなのがトップだと、『あ、心配してくれてるんだな』って気になるんだよな。自分たちのこと、ただの駒みたいに考えてねえなって。

だから、できると思うぜ」

毎度のことで我ながら情けないけど、また涙が出てくる。

「ほらな、これだけで泣いちゃうし。」

まあ、お前自身はそうとうツライだろうけどさ、周りは好きでついてきてる、ってパターンになるんじゃないのか？

だから、やってみるよ」

最大級の、励まし。

イマドにそう言われると、できそうな気がする。

「ありがとう……」

泣きながらだけど、笑ってみる。

そんなあたしを見て、彼も笑った。

「そうそう、その顔な。」

あ、そうだ。すっかり忘れてたぜ」

何かを思い出したようで、イマドがポケットをまさぐった。

Episode:16

「ほら、これやるよ」

「え？」

あたしの目の前に、小さな包みが差し出される。

「これ……？」

「いや、いちおうその 俺からな」

「くれるの？」

あたしがそう言うと、困ったように彼が頭を掻いた。

「だ〜から、俺からだって！」

「えっと、何が……？」

「だから、誕生日のプレゼントだっつーの！」

「あ……！」

やっと意味を飲み込む。

「えっと、その、もらっていいんだよね……？」

「お前がもらわなかったら、誰がもらうんだ」

「あ、そっか」

イマドがため息をついた。

「つたく、どこまでボケてんだ」

「ご、ごめん……」

自分になさけなくなつて、なんだか泣きたくなくなる。
でもその前に、イマドが包みをあたしに持たせた。

「開けられっか？」

「う、うん」

リボンをほどいて、包み紙を破らないようにそつとはがしていく。
中から箱が出てきて、それもそつと開けた。

「あ……」

自分の顔がほころぶのが分かる。

出てきたのは、可愛いキーホルダーだった。

「ごめんな、ンなちっちゃいモンで。

まさかお前が、あそこまで大金持ちのお嬢さんだとか、思ってなくてよ」

「うっん、いい。これで、いい……」

どうしてだろう？ 悲しくないのに、涙が出てくる。

「大事に、するから……」

「ンなたいそうなモンじゃねえって。

それよりそろそろ、戻るか？ いい加減暗くなっちまったし」

言われてあたりを見回すと、確かにもう日が落ちて、空に星がまたたいていた。

吐く息も少し白い。

「そうだね」

優しい潮騒の音を聞きながら、学院への連絡船に乗った。ほかに乗客はいない。

船の後舷へ出てみると、街の明かりが遠ざかって、暗い海の上にゆらめいた。

振り仰ぐと、煌く星が目飛び込む。
海にまたたく灯と、空にまたたく星。

この光景を忘れたくない、そう思った。

F i n

あとがき

最後まで読んでくださり、ありがとうございます。明日より第6作「表と裏」の連載となります。いままでどおり、毎日“夜8時過ぎ”の更新です。

明日は恐れ入りますが、こちらか筆者サイトのリンク、または検索サイト内よりお願いします。

感想・批評、メッセ等大歓迎です。お気軽にどうぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3221e/>

温もり ルーフェイア・シリーズ05

2011年2月6日17時55分発行